ポスドク 博士単位取得後の任期付き研究者

人材活用の道は？

全国17大学の院生100人 熊本大で討論

「研究で培った能力 強み」

大学や修士課程より高度な研究を重ねる大学院博士課程。巣立つ博士たちは専門的な知識や技術を身に付けているが、大学や企業の雇用に結び付かない「ポスドク（ポストドクター＝博士学位取得後の任期付き研究者）」の在り方が近年、社会問題化している。どうすれば社会で活躍できるか―。全国の大学院生らが熊本大で意見を交わした。

「全国の博士課程修了者の就職率は約６割と低水準。ニーズが多様化し、企業が求める技術を持つ人材が少なくなった」。熊大の久恒昭哲特任准教授(43)は、現状をこう分析する。

企業は高い専門知識を持つ博士を敬遠し、四年制大学を卒業した人を「企業のニーズに合うように育てる傾向がある」と久恒特任准教授。大学に就職できても非常勤というケースも多く、「任期が切れれば〝高学歴ニート〟になってしまう」と危機感を募らせる。

足りないものは

６月、熊本市中央区の熊大薬学部であった学生会議。全国17大学の大学院生ら約100人が、グループ討論を繰り広げた。

「私たちに足りないものは何？」―。こんなテーマでは「研究が、社会にどのような意味があるのかを発信しなければならない」「ゼロから何かを生み出す力に欠ける」と、自らを冷静に分析。一方で雇用側が求める能力を推し量った議論では、「問題解決能力」「長期的な研究で培ったマネジメント能力」という大学院生の意見が目立った。

博士として働く以上、「（大学卒の）学士や修士とは違う収入が欲しい」という本音もちらり。雇用に結び付く仕掛けとして、「博士が自らの能力をＰＲして、企業や行政の指名を受けるドラフト会議を開催」「専門知識や技術を客観的に把握できるような基準を定める」などのアイデアが出た。

博士の雇用問題について議論を交わす大学院生ら＝熊本市中央区の熊本大薬学部

リーダー育成目指す

ポスドクの課題解消に向けては、文部科学省が2011年度から「博士課程教育リーディングプログラム」を展開している。

国際的に活躍できる人材の育成を目指し、大学院教育の抜本的改革を支援する取り組み。採択された30大学62プログラムのうち、熊大の「グローカルな健康生命科学パイオニア養成プログラムＨＩＧＯ（ヒゴ）」は、医学と薬学の大学院生を対象としている。リーダー育成を念頭に、中国やバングラデシュなどの留学生を含む27人が学んでいる。

今回の学生会議は、この博士課程教育リーディングプログラムの採択を受けている九州の全３大学（熊大、九州大、長崎大）の大学院生が、ポスドクへの危機感から開いた議論の場だった。

企業の立場で参加した化学及血清療法研究所菊池研究所（菊池市）の岡悦郎研究管理課長(51)は、「大学と異なり、企業の研究開発はテーマが次々に変わる。狭く深い専門知識を持つ大学院生よりも、広く浅い知識のままの学部生が使いやすいのは事実」。しかし、大学院生の問題意識に触れ、「博士の強みと主張していた問題解決能力やコミュニケーション能力に注目したい」と話した。

学生会議を終えた、実行委員長の熊大大学院医学教育部修士課程２年（博士前期）呉花楠（くれはなん）さん(25)は、「博士が自らの知識や技術を積極的に社会に発信し、活用されることで、日本経済のイノベーション（革新）のきっかけとなれば」と手応えを語った。

（後藤仁孝）